
バズ

レモン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バズ

【Nコード】
N8105L

【作者名】
レモン

【あらすじ】
リチャード家のペットの猫であるバズは、4歳のリジーと赤ちゃんのトミーの仲が悪いことを心配している。リチャード夫人は新しい仕事につくことになったので、リジーとトミーとバズはレベッカおばさんのところに預けられる。リジーは幼稚園の絵画コンテストの絵を描くことに意気込んでいる。しかし、そこである悲劇が起こる。リジーとトミーの仲は果たして修復されるのだろうか…。

第一章 バズ

こんにちは！僕の名前はバズ。僕は猫で、リチャード家に飼われている。八つのひげと三万五百九十二本のさらつとした白い毛（全部数えたんだよ）、大きな輝く緑の目とベルのついた首輪を持っている。僕は自分の隅々まで美しさを持っている。名前を除いて、ね。僕の名前はもちろん美しくはない。

ルシエルという名前が僕の首輪には縫い付けてある。それが僕の本当の名前だ。「バズ」は他の誰かがつけたあだ名だ。その「他の誰か」はトミーだ。

トミーが僕のことをバズと呼ぶようになってから、みんな僕のことをそう呼ぶようになってしまった。僕はルシエルの方がいいけど、ルシエルの方がバズより千倍かつこいい。でも僕は猫だから喋れない。だから僕はその名前でご慢するしか選択肢がない。リチャード家は典型的なアメリカの家族だ。少なくとも昔は典型的なアメリカの家族だった。でもそれはトミーが生まれる前の話だ。

僕は昔はリチャード夫人、リチャード氏とトミーのお姉さんのリジーと平和に生きていた。リチャード夫妻は本当にいい人たちだ。優しくて面倒見がいい。僕が子猫だった頃に獣医から拾ってくれた。リチャード氏は風船ガム会社で働いている。色んな種類の風船ガムを作る。リチャード氏はほとんどの時間会社で働くが、時々家でも働く。彼は特別なガム研究部屋をもっていて、僕はそこを探検するのが大好きだ。色んな液体や器具がある。

リチャード氏はすごくだらしない時がある。研究部屋はとても汚い。反対にリチャード夫人はとてもきちんとしている。彼女はだらしないのが大嫌いだ。彼女の几帳面さにいらつかないように気を付けている。

リチャード夫人の趣味は（家を片づける以外では）お裁縫である。子供たちや僕のためにいつも洋服や布団を作ってくれている。昔は

彼女が縫っている間、僕が彼女の膝の上に座っていたが、最近はその特等席はリジーやトミーに占領されている。

リジーは四歳だ。（本名はリサだ。）彼女はトミーほど悪くはない。もちろん彼女は迷惑な時もある。昔は僕のひげをいつも引っ張っていた。最近はそれをしなくなったけど。それに、トミーに比べればそれは全然大したことではない。

台所で彼が作る音といえば最悪だ。彼はポットやフライパンをばんばん叩く。最近は叩くだけでなく、投げたりもする。どうりでリチャード夫人は最近たくさんの頭痛がするわけだ。彼は僕のしっぽを踏んだり、リジーが昔、していたように僕のひげを引っ張ったりする。政府は赤ちゃんが猫のひげを引っ張ることに対して法律を作るべきである。そして、まだある。彼は食べる時に辺りを散らかし、いつも叫んだり泣いたりしている。

一番ひどいのは彼が強制的に僕を風呂と一緒に入れる時だ。彼はほとんど僕を溺れさせている。そしてリチャード夫人は疲れているからといって、それについて何もしてくれない。なんて冷たいんだろっ？

トミーは僕に問題を引き起こすだけでなく、リジーにも引き起こしている。

僕はよくトミーがたくさんの注目を浴びていることにリジーが嫉妬していることに気づく。リチャード夫人はトミーを世話するのに忙しすぎてリジーの世話までできない。僕は彼女の気持ちがよくわかる。もし喋れたら、僕はリジーに、それはリジーが生まれた時に僕が感じたこととぴったり同じだということを伝えたい。

食卓で、僕はまたリジーとトミーの間で喧嘩が起きるのを見た。

「ママ、トミーが机じゅうにまた豆をこぼしている。」とリジーは文句を言った。

「仕方ないのよ、リジー。彼は赤ちゃんだから。」とリチャード夫人は言った。

「もし私が食べ物を机じゅうにこぼしていたら怒らない？」とリ

ジーは不機嫌そうに言った。

「リジー、あなたは赤ちゃんの頃食べ物の七十五パーセントは机にこぼしていたわよ。」とリチャード夫人は答えた。

「そんなことないよ！」とリジーは顔を赤くさせながら叫んだ。

「そうだったわよ」とリチャード夫人はよく知っているように言った。

「ふんっ。」リジーは貶された口調で言った。「でもやっぱり汚いよ。食欲なくした。」

リチャード夫人はため息をついた。僕は彼女が少しかわいそうに思えた。とても疲れている様子だった。「静かに食べなさい、ね？」と彼女はリジーに言った。

リジーはトミーに気持ち悪そうな顔をしたが、トミーは気付かなかった。彼は会話すら理解できなかった。

僕は首を振った。このリジーとトミーの間の冷たい壁はいつまであるのだろう。

第二章 リチャード夫人の新しい仕事

リチャード夫人は次の土曜日の朝にある告知をした。

「私は新しいパートタイムの仕事に就くことになったの。」と彼女は言った。「月曜日からデザイナーになるのよ。」

「本当に？」リジーは目を丸くして聞いた。

「ええ、そうよ。毎週月曜、火曜、木曜、土曜の午後2時半から6時半まで働くのよ。」

「それじゃあ誰が私たちとその時一緒にいるの？パパ？」とリジーは聞いた。

「いいえ、パパじゃなくレベッカおばさんよ。彼女があなたを幼稚園から拾ってくれるわ。」とリチャード夫人は言った。

僕は鼻に皺を寄せた。レベッカおばさんはリチャード夫人以上に潔癖症だった。彼女の本棚をよく覚えている。本はすべて作者のアルファベット順になっていて、大きいから小さいのへと並んでいた。

「私はバズとトミーをそういう日は2時ごろレベッカおばさんの家へ連れていくわ。レベッカおばさんが夜ごはんを作ってくれるから。」

僕は内心唸った。レベッカおばさんは料理が下手だからだ。でも待てよ、僕はキャットフードを与えられるから、もしかしたら関係ないかもしれない。

ある日、リジーは幼稚園から家に興奮した勢いで帰ってきた。大きな模造紙を持っていた。

「ねえ、聞いてよ！」と彼女は叫んだ。

リチャード夫人は彼女に微笑んだ。「どうしたの？」

「私、絵を描くの！コンテストのために。」リジーは台所でピエロ・ンピオンはねながら言った。

「ほんと。」リチャード夫人は言った。彼女はお皿を洗うために洗面台へ行った。

「テーマは『あなたにとって一番大事な人』、」とリジーは続けた。「そして私は-」

「あら、私トミーの部屋の鍵閉めたかしら？」リチャード夫人は心配そうに独り言を言った。トミーはつい最近ドアの開け方を学んだ。赤ちゃんがドアを開けられるのは悪いことではない。その赤ちゃんとトミーじゃなければ、の話だが。トミーが家をうるついついてると何が起きるかわからない。そのためにリチャード氏はトミーの部屋に鍵を買った。

「だから私は-」とリジーは言いかけた。

「あ、そうだ、リズ、食堂の机を整えてくれない？トミーのおしめ交換しないとな。」

リジーはちよつとふてくされた様子だった。もつとお母さんからの熱意がほしかったのだろう。

その日から、リジーは絵を描くために自分の部屋でたくさん時間を過ごすようになった。

前も言ったように、レベッカおばさんの料理はとんでもなくひどい。彼女はキャットフードを持っていなかったために僕にそれを与えてくれなかった。僕は強制的にほうれん草の盛り合わせを食べさせられた。とてもまずかった。

リジーもあまり嬉しそうではなかった。ある日、僕はリジーが窓の外に皿の上に乗った食べ物を投げ捨てているのを見た。僕は笑った。リジーにしても、結構ワイルドなことをしたな、と思ったからだ。でも、僕ももつと身長があればきつと同じことをしていただろう。

レベッカおばさんは小さなことで怒る。言うの忘れたが、レベッカおばさんは実は先生なのだ。だから子供を叱るのに慣れている。彼女は読書をリチャード夫人よりもずつと厳しくリジーに教える。

「リズ、その言葉はシェイプで、シープじゃないわよ。わかった？もう一度言ってごらんなさい。シェイプ。」

「シープ。」とリジーは答えた。僕は彼女が機嫌悪いのがわかった。彼女は30分以上勉強したことがない。それは四歳児には普通だろうけど、もう一時間半以上も勉強している。イラつくのも無理ないだろう。

レベッカおばさんは首を振った。「シェイプ。」

「シープ。」とリジーは言い、腕を胸の前で組んだ。

『正しく言いな、リジー。そしたら解放してくれるから』と僕は頭の中で伝えようとした。人に理解できないことを知っていて、それをその人に伝えられないのはつらいことだ。

「シェイプよ、リジー。シェイプ。」

リジーは首を振った。「発音できない。」と彼女は言い、手を空中に広げた。「もう行っている？」

「正しく発音できてからね。さぁリズ。急いで。」レベッカおばさんは彼女の腕をつかんだ。

長い沈黙があった。僕はリジーが正しく言おうか頑固に間違っと言おうか迷っているのを知っていた。そしてついに、「シェイプ。」と言った。

笑うどころかレベッカおばさんはリジーを叱った。「ほら、こんなに時間をかけて。知ってたんなら最初から正しい発音をすれば良かったのに。」

リジーは大声で文句を言おうか泣きだそうかしたそうな様子だった。彼女は口を開け大きな喧嘩を起こしそうだったから僕は耳をふさいだ。だが口から何も言葉は出てこなかった。

僕は彼女がかわいそうに思えたが、ある意味安心した。もしかしたらこれからは大声で怒り出したりしなくなるかもしれない。

第三章 悪いリジー

僕は間違っていた。リジーはレベッカおばさんの家では怒らなくなったが、家ではモンスターになった。

「やだ！やだ！やあだ！行かない！行かない！絶対行かない！」

僕は耳をふさいだ。（僕には「手」がないから結構難しいんだよ。）「あいつ」による大きな叫び声で僕は起きてしまった。

リジーは最近、普通の4歳の女の子とはすぐかけ離れてきている。もしかしたらあなたは何が起きてるのかわからないかもしれないから、念のため説明しておこう。リジーが「行かない」と言っているのは幼稚園のことである。

「リジー……」

「やだ！やだ！やだ！私はこれから悪い女の子！だから学校行かなくていいの！」

ああ、そうだ。もう一つ情報があった。リジーはおかしなことを信じ込んでいる。彼女は自分が「悪い女の子」だと信じていて、悪い女の子は人の言うことは聞かなくていいと思っている。（人間の女の子たちは色んな変な発達段階を示すんだね。）

「行かないや、リジー。学ばないと、みんなより勉強遅れちゃうわよ。」

「そんなの気にしないよ、だって私超悪いもの！」とリジーは叫んだ。

リチャード夫人はため息をついた。

「僕、悪い女の子」とトミーは笑いながら言った。

「馬鹿ね、あんたは男よ！」とリジーは叫んだ。

「リジー、それは弟に話しかける話し方じゃありませんよ。」

「知ってるけど、関係ないよ、だって私……」（次何が来るかはわかるでしょう）「悪い女の子だもん！」

「あら大変」とリチャード夫人はつぶやいた。

ピンポン！

ドアが鳴った。リジーはドアへと階段を駆け降りた。ドアを大きく開き、「勝手にしろよそのー」

リチャード夫人はリジーの口の上に手をかぶせた。そこに立っている女性を見て、彼女は気絶しそうになった。

「ごめんなさい、彼女の今言ったことは忘れてくださいー」と彼女は言いかけた。

「大丈夫ですよ。」と女性はきつい笑顔で言った。

その女性はリジーが行っている幼稚園の校長先生であるグリーン先生だった。

「あの、リビングに来てください、えー、お茶を出しますのです。」リチャード夫人は台所へ走って行った。途中で、トミーのおもちやにつまづいた。

グリーン先生はしかめ面をした。彼女はおでこに皺を寄せていてとてもきびしそうだった。灰色の髪の毛がきちんと団子状にたばねてあって、とても高い頬骨の持ち主だった。

リチャード夫人は本当に疲れていたのだろう。もしくは焦りすぎてよく考えられなかったのか。いずれにせよ、彼女は校長をリビングに呼んだのは大間違いだった。リビングはおもちやや本、汚い服で覆われていた。それはリチャード夫人が先週風邪をひいたからだ。他の家族のメンバーはどうしようもなくだらしないので、家はごく散らかってしまった。

グリーン先生はリビングを開けようとして、開かなくて少し顔を歪めた。もう少し強く押して、ようやくそのドアの下のいくつかの服をどかしながら開けられた。

グリーン先生はリビングを見てはっと息をのんだ。そして喉を鳴らし、一生懸命汚い服を踏まないようにしながら注意深くソファへ向かった。ソファもおもちやや服で覆われているのを見た。彼女はよだれで濡れたぬいぐるみの恐竜を指先で拾った。まるで菌の球のように。彼女の顔は軽蔑と気持ち悪さでいっぱいだった。

リチャード夫人が紅茶を持ってリビングに来た時、彼女の顔は恐怖で蒼白くなった。きつとほとんどの時間自分の部屋で過ごしていて、リビングが散らかっていることをすっかり忘れていたのだろう。「あらー、ごめんなさい、すっかり忘れていてーあの、私熱がありましたー」

「大丈夫ですよ。」とグリーン先生は、リチャード夫人が言い訳しているかのように、またきつい声で言った。

「あの、えーっと、これが紅茶です。」リチャード夫人は言った。「あーミルクと砂糖を忘れたわ！あともしかしたら生クリームやレモンも！あとー」

「私はミルクや砂糖を入れないで紅茶を飲むのが好きです。」とグリーン先生は言った。

「そうですかー」

と、その時トミーは気味の悪いゴリラのマスクをしてグリーン先生の膝の上に乗った。

「トムー」リチャード夫人は言い始めた。

「ラララララー！」

どこからともなく、リジーが緑のわにのぬいぐるみを持ってソファの上に光のような速さで飛び乗ってきた。わにも本物のわにの皮でできた気味の悪いものだった。

「トミー見て！緑の校長と緑のわに！面白くない？」リジーはソファの上でぴょんぴょんはねながら叫んだ。

トミーは彼女が何を言っているのかもよくわからず笑い、ソファの上で跳び始めた。

「いい加減にしないさい！」グリーン先生は叫んだ。リジーとトミーはようやくソファで飛び跳ねるのをやめた。

「リサ・ガブリエル・リチャード、後であなたと話があるわ。それまで、自分の部屋にいて反省しなさい。」とリチャード夫人は言った。彼女がここまで怒っているのを見たことがない。

リジーは仕方なく上へ行った。リチャード夫人はトミーを赤ちゃ

ん籠の中に入れた。やっと家は静かで平和になった。

グリーン先生は首を振った。「あなたの子供たちはいつもあんな感じなの？」

「いいえ、今ちよつと変な時期を迎えていまして。本当に申し訳ありません。」

「あら、そう。」グリーン先生は聞こうとしなかった。「とにかく私は最近のリジーの学校での悪い態度についてお話したくて来たのです。彼女は先生の言うことを聞かないし、大きな声をあげて怒るのです。彼女は「しつけ」という言葉を知らないようです。リジーに何が良くて何が悪いかを教えるもつといい方法を考えた方がいいです。」

グリーン先生はしつけや子育てについて話し続けた。リチャード夫人の顔は赤くなった。

ようやくグリーン先生は帰った。

「リサ、来なさい。」リチャード夫人は呼んだ。リチャード夫人はほとんどリジーをリサと呼んだことない。『大変だ。彼女は怒られるぞ。』と僕は思った。

リジーは腕組みをした状態で階段を下りてきた。何も言わず椅子に座った。リチャード夫人はその隣に座った。

「あなたが今したことを反省した？」リチャード夫人は静かに聞いた。

「いいえ。」とリジーは答えた。

リチャード夫人はため息をついた。「リジー、グリーン先生はあなたが学校で色んな問題を起こしていることを言ってたわよ。それ、本当なの？」

リジーは床を見た。「学校つまらない。私もう行かない。悪い女の子だから。悪い女の子は学校行かなくていいのよ。」

「じゃあ悪い女の子ならテレビも見なくていいのね。ゲームをしたり、6時以降まで起きていなくてもいいのね。」とリチャード夫人は言った。

「悪い女の子はテレビ見れるよ。悪い女の子はなんでもできるんだよ。」とリジーは抗議した。

「いいえ、できないわよ。悪い女の子にはその特権がないのよ。」とリチャード夫人は言った。

リジーは少し考えてるようだった。そしてリチャード夫人を見上げて、「ママ、私も悪い女の子じゃないよ。」と言った。

リチャード夫人はリジーに大きな抱擁をした。そしてそれが「悪いリジー」の終結だった。

第四章 口論

僕はリチャード夫人とリチャード氏の間で何かがおかしいことにある真夜中気付いた。僕は彼らの声で突然起きた。

「あのネックスに六十ドルも使ったのか？ 買う前によく考えろと何回言えはわかるんだ？」とリチャード氏が言っのが聞こえた。

「あなたこそ私の夫じゃなく父のような話し方するのやめてくれない？」リチャード夫人は言い返した。「いつもあなたが部屋を掃除してるのは誰だと思っているの？」

「そんなこと関係ない。」とリチャード氏は言った。

「どうして？ なんで私ばかりがいつもあなたのアホなお説教を聞いてなきゃいけないのよ？」

僕は眠すぎてそれ以上は聞けなかった。気付かないうちに僕は眠りについていた。

「掃除機をクローゼットの中に入れるなって言ったでしょ！！」リチャード夫人の声が廊下から響いてきた。

土曜の朝はまたけんかで始まった。『なんて不愉快な目の覚め方なんだろう。』と僕は思った。僕はもう一度寝ようとしたが、彼らの声が大きすぎた。もし僕が喋れたら、一番大きな声で「静かに！」と叫んだだろう。

「そんなの大したことないだろ。まるで俺が掃除機をクローゼットに入れたら世界が崩壊するみたいな言い方じゃないか。」

「掃除機はきれいじゃないのよ。もしかしたらあなたは服に穴があいたり虫がついていても気にしないかもしれないけど、他のみんなは気にするのよ。」

リチャード夫人もリチャード氏もとても機嫌悪かった。

普通土曜や日曜の朝はリチャード家は一緒にごはんを食べた。しかし、その日リチャード氏は散歩に行くと行って出かけていた。

リジーとトミーは土曜の夜まで、リチャード氏とリチャード夫人の間で何かがおかしいことに気付いてないようだった。

「マーク、私が買い物に行ってる間子供たちの世話をして。」リチャード夫人は命令した。

「もちろんですよ、陛下。」リチャード氏は皮肉に言った。

リジーはそれを面白いと思い、笑った。

リチャード氏は働くために研究部屋へ行った。しばらくの間、リジーとトミーは静かにリビングで遊んでいた。そしてリジーは何かトミーの耳にひそひそと言い、二人はリジーの部屋へ行った。僕は次に何が起きるんだろう、と思いながら興味深く彼らを見た。

一秒後、リジーとトミーはそれぞれまくらを持って部屋から飛び出した。リジーは布団も持っていた。

リジーは階段下にある床に布団を敷いた。そして彼女は階段のてっぺんへと走って戻った。「見ててね。」とリジーはトミーに言った。彼女はまくらを手すりにのせて、滑り下りた。「ヤッホオオ！」彼女は布団に落ちた。

「さあ今度はトミーの番よ！」リジーはトミーをまくらにのせた。僕は必至で鳴き、彼らを止めようとした。リジーは大丈夫かもしれないけど、トミーはまだ赤ちゃんだ。落ちるかもしれない。リジーは僕を無視し、手すりに沿って彼を押した。

その時リチャード夫人が玄関のドアから入ってきた。彼女は上を見上げて、トミーが手すりを滑り降りているのを見た。

「トミー、ダメよ！」と彼女は叫んだ。

トミーは彼女の方を見た。その瞬間、トミーはバランスを崩し、まくらが手すりから滑り落ちた。彼は階段に落ち、何段か転げ落ちた。

トミーは大丈夫だった。怪我は上腕にかき傷ぐらいだった。しかし、リチャード夫人はとても怒っていた。リチャード氏に対して。

「あなたは二時間子供たちの面倒見ることもできないの！！」リチャード夫人は叫んだ。

『わあ、彼女怒ってる。』と僕は思った。

「アンナ、あれはただの事故だ。誰にでも起きる。」リチャード氏は言った。

それは結構リチャード氏が言うには無責任な言葉だなと僕は思った。しかし、僕がリチャード夫人だったらもう少し優しくリチャード氏に言っただろう。これがリチャード夫人のリアクションだ。

「ただの事故ですって？じゃあ、あなたが台所で火を消すのを忘れたせいで誰かが死んだらそれはただの事故なの？マーク、何か間違いをするのも悪いけど、それを否定するのはもっと悪いのよ。あなたがもっと子供たちを注意深くみていれば、こんなこと全部起きなかったのがわからないの？」リチャード夫人は大声で言った。

「小さな傷だよ。」リチャード氏は言った。

「それは彼がラッキーだったからよ。もしトミーが首の骨を折ったりしていたらどうよ？あなたはどうしてた？」

その間、リジーとトミーは台所にいた。トミーは一番好きな趣味のことをしていた。フライパンを叩き合わせて大きくうるさい音を立てることだ。

「うるさいよ。」とリジーは小声で言い、まるでリチャード氏とリチャード夫人が喧嘩しているのはトミーのせいであるかのように責めるような目線を送った。

トミーはまだリチャード氏とリチャード夫人の間で何かがおかしいことに気づいていなかった。しかし、リジーは彼らが喧嘩していることを知っていた。かわいそうな彼女は親が離婚するんじゃないかと思っただけでそうなくらい心配な様子だった。僕もこんなことがリチャード氏とリチャード夫人の間で起こるなんて思ってもみなかった。二人はいつも幸せそうだったのに。

その日の真夜中、リチャード氏とリチャード夫人はまた喧嘩をしていた。

「何もうまくできないの？なんで私の一番いいフライパンを傷め

るの？」リチャード夫人は叫んだ。

リチャード氏は、最近よくリチャード夫人に怒鳴られてストレスがたまっていたせいか、「いかれてて馬鹿でヒステリーな女みたいになるまうのやめてだまってくれないか？」と言った。

「なんですって！この、この馬鹿はげ、いつも何時間も鏡を見て髪を直すけど、どんなにがんばってもその汚い顔を隠せない。」

「言っただな？」

僕は笑いをこらえた。これは大人の喧嘩じゃない。6歳児が互いを批判し悪口を言ってるようにしか見えなかった。

そして僕はリジーが部屋を出るのを見た。彼女は廊下を歩き、トミーの部屋に入った。僕は興味深く彼女の後について行った。リジーは赤ちゃん籠の中に入り、トミーの横で眠りについた。きっと仲間がほしかったのだろう。それかもしかしたら彼女はまた籠の中で寝たくて、リチャード夫人が喧嘩で気がそれてるその夜が一番こっそり入るのに適した時だったのかもしれない。

どっちみち、二人は隣り合って寝ていて、とても気持ちよさそうで平和そうだった。僕は微笑まずにはいられなかった。

第五章 リジীর繪

「終わったあー!!!」リジীরはある午後叫んだ。

リチャード夫人はソファの上で寝ていた。とても疲れている様子だった。「何が終わったの?」

「もちろん、絵のことよ!覚えてる?コンテストのための絵。」

「あら、宿題が終わったのかと思ったわ。」

「マーマ!描くのに何時間もかかったのよ。それに絵は宿題の一部でもあるし。」

「偉いわね。」とリチャード夫人は言った。

「見たい?」誰も答える前に、リジীরは紙を広げた。「じゃーん!」

誰をモデルにしたと思う?僕だった!とても素敵だと思わない?まあぐちゃぐちゃで、僕はその絵の中では耳を持つ黒いボールみたいだったけど。

「あの、素敵だけど、リズ、一番大事な人ではなかったの?」

リジীরは肩を上げて知らんぷりした。

その時上の階から叫び声がした。「わああああ!」とトミーが泣いた。

リチャード夫人は唸りながら起き上った。

「ママ、私最初はママを描こうと思ったけど、最近ママは私のこと無視してるからやめたの。」とリジীরはリチャード夫人が階段を上っている時に言った。

リチャード夫人は止まって振り向いた。「あら、リズ、私はあなたを無視しているのではないのよ。ただ疲れちゃって。」

「わああああ!」とトミーは叫んだ。

「ごめんね、リズ、後で話すわね?」リチャード夫人は急いで言った。そしてトミーの部屋へ走っていった。「トミーどうしたの?大丈夫?」

「トミー、トミー、トミー。それしかママの頭の中にはないの？」とリジーは小声で言った。リジーは僕のことを描いた絵を自分の部屋に置き、僕を外に引きずり出して無理やりかくれんぼうを遊ばせた。（リジーが隠れて僕が鬼だった。）

トミーはベッドを濡らしてしまった。それなので、おしめを交換してから、リチャード夫人はシーツや布団まで変えなければいけなかった。リチャード夫人はすべてを掃除してる間トミーをリジーの部屋に置いていた。終わったら彼女はソファに倒れ、リジーとの話のことも忘れてしまった。

その間、リジーはかくれんぼうをするのに飽きてきた。彼女は僕をつかみ、裏庭の一番好きなオークの木の下に巣綿。温かい風が通り過ぎた。リジーは僕をしっかりともった。とても深く考え込んでいるようだった。

「バズ、私がなんであなたをコンテストに描いたのか知ってる？」リジーは突然、僕が猫ではなく本物の人であるかのように話しかけた。「それはあなたが私を裏切らないからよ。私を傷つけたり悲しませたりしないからよ。あなたが猫であるからかもしれないけど、私はあなたを信用のおける友達として持っていることを本当に嬉しく思っているのよ。」

僕は本当に感動した。ただのいつでも遊べるペットではなく、信用のおける友達として思ってもらえるのは嬉しいことだ。

何分後かに、リジーと僕は中に入った。リジーは自分の部屋に行った。

「きやあああああつ！」

悲鳴が静かな家に響き渡った。本日二つ目の悲鳴。今度はリジーのだった。

「今度は何？」とリチャード夫人は唸った。

リジーは部屋のドアのところに立っていた。僕は中を覗き、トミーが片手に紫色のマーカー、もう片方の手にオレンジのクレヨンを持っているのを見た。彼はリジーの絵の隣に座っていた。僕は絵を

見てハッと息を飲んだ。絵はマーカーやクレヨンで落書きされていた。

「私の絵！」リジーは叫び、ボロボロになった絵を拾った。大きな茶色い目に涙があふれた。「どうしてこんなことをさせるの、ママ？すべてを台無しにしてるわよ！」

「ごめんね、リジー。私のせいだったわ。彼をあなたの部屋に置くべきではなかった。本当に、本当にごめんなさい。お詫びするわ。」

「もういいよ！もう散々よ！ママがパートタイムの仕事があるから週に四日間もレベツカおばさんの家にいなきゃいけない。嫌いな食べ物を食べたりいっぱい勉強しなきゃいけない。仕事があるからパパとは遊べない。そして今はママと時間を過ごすこともできない。特にママが家にいる九十パーセントの時間をトミーの世話するのに使っているからね。さらに私はママとパパが喧嘩しているのを聞いて学校で頭痛がするのよ。不公平よ！トミーは何したって何も問題が起きないのに。なんで私だけがつらい思いをしなきゃいけないのよ！！」リジーは泣いて、絵を半分に千切り、階段を駆け降りた。

第六章 火事

事件から2日が経った。リチャード夫人は買い物に行き、リチャード氏は会社の同僚の人たちとコーヒーシヨップに行ったので、リジーとトミーと僕はその日はアニーの家に行った。アニー・バレルはリジーの親友で、道の真向かいに住んでいた。

アニーの家で最初にしたことは金魚を見た。とてもおいしそうだった。(アニーは僕を金魚に近づけてくれなかった。)

次に不思議な国のアリスを遊んだ。このゲームはリジーが作った。劇のようなものだ。まず、アリスがうさぎを追いかけて穴に落ちるところから始まる。そこからは、自分でオリジナルなストーリーを考える。今日はアリスはなかなか大変な一日を過ごした。穴に落ちた後、暗い王国に入ってしまった、そこには色々な悪い精霊が住む。姫は人質としてキング・ブラックの部屋に閉じ込められていた。アリスは七つの頭を持つ巨大な竜や火を吹く猿、飛んでくるサメと戦わなければならなかった。

そのうち、不思議な国のアリスを遊ぶのにも飽きてきた。「外で遊ぼう。」とアニーは提案した。

「バズが鬼ね。」とリジーは言った。

僕は唸った。走る気になれなかった。話せないのは本当に不便なことだ。

「家の中であればどこにでも隠れていい。わかった？」とリジーは言った。「じゃあバズは50まで数えて。目も閉じて。」

『威張ってるな、リジー』と僕は思った。僕は頭の中で数え始めた。時計をちらっと見た。午後一時。リチャード夫人が帰ってくるまで二時間もある。これは長い午後になりそうだ。

かわいそうな僕。もう三時間半以上も探したり追いかけてたりしている。リチャード夫人はさっき遅くなると電話してきた。

僕は何度かリジーやアニーを見つけているが、僕が見つけると彼女らはまた逃げて違う場所に隠れる。終わらないいじめだった。

その時、僕はあることに気付いた。このゲームを始めてから、まだ一度もトミーを見ていない。もう四時間近くも遊んでいる。僕は家じゅうの隅々まで探した。けど、トミーはどこにも見なかった。どこかにはまって出られなかったりしているのでは？あるいは道に出てしまったとか？それは大変だ。もっと早く気付くべきだった。

僕は庭を探し始めた。そして、僕の家とアニーの家の間の道に踏み出した。

「バズ！道に出ちゃいけないんだよ。そこはあなたの探す場所じゃない。」とリジーは僕に呼びかけた。

「リジー、彼にはリジーが何て言ってるかなんてわからないよ。彼は猫だもの。」とアニーは言った。

「わかるわよ。彼は喋れないけど、聞こえるのよ。」とリジーは反論した。

その時、僕はリチャード氏の研究部屋で大変な変化に気付いた。煙が出ていた。僕の顔から血の気がひいた。『やばい…』

僕は一番速いスピードで家に向かって走り出した。

「ちよつと、どこ行ってるの、バズ？」リジーは叫んだ。

僕は彼女を無視して、玄関のドアに突撃したが、もちろん動かなかった。鍵がかかっていた。僕は焦り始めた。どうしよう、どうやったら入れるだろう。変なおいが家の周りを漂っている。ひどかった。その時、僕は気付いた。もし、トミーが家に入れたのなら、きっと玄関のドアを使う以外の入り方があるのだろう。

と、その時、バレル夫人が僕たちの方に向かって走ってきた。

「ちよつと、道に出ちゃダメって…」

彼女は屋根から出てきている煙を見て固まった。

「火事だわ！」彼女は叫んだ。

彼女は消防隊を呼ぶために家に走って戻った。

その間、僕は家の周りを鍵のかかっていないドアか窓がないか探

すために走り回っていた。ようやく、僕は台所の近くに小さなドアを見つけた。ちょうど赤ちゃん - もしくは猫 - が通れるぐらいの大きさだった。僕は中に飛び込み、リチャード氏の研究部屋へと駆け上がった。

トミーは床に横たわっていた。僕は彼を起こそうと、彼を押したりニヤーと鳴いたりした。しかし、彼は起きなかった。煙のため意識を失ったのである。僕は猫なので、彼を抱くことも引きずることもできない。僕は無力な感じがした。

「トミー！」とリジーは叫んだ。まるで僕の祈りに答えるかのように、リジーはトミーを拾い、階段を駆け降りた。僕は彼女らの後ろを走った。リジーは咳をし始めた。僕も気持ち悪くなりだした。

リジーは玄関のドアの鍵を解除し、僕らは何とか安全に外に出られた。僕は家を見てびくつとした。半分は火事で燃え上がっていた。オレンジの火花があちこちに散っている。空気は黒い煙だらけだった。

バレル夫人は僕らをバレル家に連れて行った。「ここにいなさい。」と彼女は命じた。

「トミー、大丈夫でしょ？」リジーは震える声で言った。彼女はトミーの手を握った。しかし、トミーは動かなかった。リジーはそれでもあきらめなかった。トミーが目を開けてくれることを切実に願いながら、話しかけ続けた。

二分後ぐらいに救急車とともに消防隊が現れた。医療チームがトミーを寝台に乗せた時、リジーの頬を涙が流れた。

リチャード夫婦はその数分後に現れた。リチャード夫人は泣いていた。リジーをきつく抱いた。「どうしてこんなことが…」と彼女はつぶやいた。

僕はこれ以上恐ろしく、衝撃的で…ひどい夜は今までに経験したことがなかった。そして、知ってる？その夜、僕の一生で初めて涙が僕の頬を流れたよ。

第七章 青いリボン

トミーはその晩、病院に泊まった。彼は大丈夫だった。軽い酸欠程度で。

リジーは盛大なお帰りパーティーをトミーのために開いた。彼女はアニーと僕と彼女のたくさんの人形やぬいぐるみを呼んだ。

トミーは喜んでいた。まあこれが自分のお誕生日パーティーだと勘違いしているようではあったが。

以後、リジーはトミーにすごく優しくするようになった。彼女は彼に自分の持つているすべてのおもちゃをわけてあげて、より忍耐強くなった。そしてもちろん、絵の事は完ぺきに許してあげた。

リジーはトミーとたくさん時間を過ごしたが、わけありそうな感じで自分の部屋で一人で時間を過ごすこともあった。

一週間後ぐらいに、リジーの絵画コンテストの日が到来した。僕たちは僕も含めてみんなリジーの幼稚園に行った。いや、本当は僕は行っちゃいけなかったんだけど、後部座席に忍び込んだ。

僕たちはリジーが絵がないことをまったく悲しんでいないことに驚いた。それか、もしかしたら秘密で僕の絵を書きなおしたのかも知らない。

すぐにわかった。

「みなさん、ニュートン幼稚園の絵画コンテストへようこそ。みなさんにお会いできて光栄です。すべての絵のテーマは『あなたにとって一番大事な人』です。三位には黄色いリボンを、二位には赤いリボンを、一位には青いリボンを差し上げます。どの絵も美しく、創造性豊かであったため、順位を決めるのはとても難しかったです。」とグリーン先生は言った。

そして審判長のスティーベンソン先生がステージに登った。「では、入賞者を発表します。第三位はルイザ・ケインの『私のお父さん』です。」

ルイザはステージに登り、黄色いリボンを受け取った。

「二位はジョセフ・ブルーノの『ヴィッキー』です。」

ジョセフは親友のヴィッキー・ストーン絵を描いた。彼は赤いリボンを受け取った。

「そして第一位は……」審判はドラマチックに一呼吸おき、観客をドキドキさせた。「リジー・リチャードの『私の特別な弟』です。」

僕らはみんな歓声をあげた。リジーは照れ臭そうにステージに登った。リジーは青いリボンとベースキン・ロビンズ・アイスクリームシヨップのサンデーの無料クーポンを表彰された。

「他にもたくさんの素晴らしい絵があります。教室の壁にかかっています。ご自由に見てください。」

僕らはリジーの教室に直行し、そこには優勝した絵が飾ってあった、部屋真ん中であつた。僕はうまくその絵を言葉で表せない。別に新しいゴッホとかじゃないけど。素晴らしく美しかったり立派であつたりというわけでもなかったが。でも……愛に満ちていた。その絵はトミーを特別な風に描いていた。彼がいかに可愛く、かついたずらっぽいかが表現されていた。

リジーはトミーの手を堅く握り、絵を指さした。「ほらね、あれがトミーだよ。」と彼女は言った。「トミーが一晚病院で過ごして、私を死ぬほど心配させてくれたおかげで、私はトミーがとってもとっても私にとって大切だつてことを知つたの。」

リジーとトミーは外に出た。僕は彼女らについていった。

「見て、トミー、虹だよ。」リジーが言った。

確かに、空には大きな虹がかかっていた。「わあ、きっと一番最後には宝が隠れてるよ。探しに行こう！」リジーはトミーの手を取り、二人は蝶々たちと一緒に草の丘を走り下った。

それは、僕の今までの人生の中で一番可愛い光景だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8105/>

バス

2010年10月14日18時13分発行